

# Miku la Chic

## スケッチ #4

### *From the Last Six 'Bagatelles Op.126'*

*Ciclus von Kleinigkeiten ... Andante Cantabile e Grazioso, Es-Dur ...*

Op.6

作曲 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン  
Ludvig van Beethoven 1770-1827 1825年頃

— 創作日本語歌詞による —  
2021年12月3日 β3版

らら... ひゅひゅ... ぼぼ  
らら... ぱぱぱ... ぱや  
らら... ぞぞ...  
うぱうぱ... うぱそぱ... ららら

はな つばみ さ かお  
花の蕾 咲いて 薫り  
とり はね うた  
鳥は 翅を 拡げ 謳う... らら  
らら... ひゅひゅ... ぼぼ

サソリ リゲル カペラ スピカ

おとめごころ わしぎ  
乙女心 鷲座 誘う... らら  
しゅしゅ... ぼぼ...  
ぽぺぴ、ぴぺぽ...  
まだ

はらはら どきどき わくわく らららら  
ちゅらちゅら ちゅらら、ひゅひゅ... ぼぼ  
ららら... るらるら

み み ふ し ぎ せ かい  
見える 見える 不思議 世界

あははいひひ うふふ えへへ... らら  
ひと ねむ とり ねむ かごめかごめ うし  
人は眠る 鳥も眠る 籠目籠目 後ろはだあれ

じゃね

#### ◎制作ノート

最晩年のバガテル四番の一曲は、何かしら背景がちがう曲想をもっている。ピアノ演奏だと違和感というほどではないかも知れないが、伝統的な現代のオーケストラ楽器をあててみると何かしらしっくり来ない。原因を探っているうちにアフリカ楽器が持つトーンが馴染むことに気づいたので、全面的にアレンジ方針を刷新したのがこのβ版。曲は強いリズムが中心となって進み、繰り返しも多いことから、おそらく空想上の異国の祭りのようなイメージではないかと想定。そのような先入観をもって聴いてみると、ストラヴィンスキーの『春の祭典』のシリアスで原始的な場面設定を、陽気で現代風に焼きあげた作品（先取り?）にも思えてこないだろうか。

想像上の異国なら時代も習慣も決めうちできず、歌詞ありきとするなら、それは、どの時代のどの地域でも普遍的に成り立つようなものだろうということで、花鳥風月や五感、よく遊びよく笑いよく眠れ、みたい不老長寿の秘訣を連想させるワードを平置きするパターンで作詞することにした。また、日本語の「そーれ」「よいしょ」「えんやこーら」、英語の「Yes」「Come on」的な調子を合わせるあいの手にあたるものが欲しくなるが、これも発音しやすい「ら」を中心としながらも、耳慣れない異国感を醸すため、この手の曲にあまり当てないようなオノマトペ音をひねり出してみた。そこは音感重視でたいした意味などなく、通常の階名ドレミファソラシドをゾレウバソラベに変えたわけでもなく、ただ速く発音できる音で馴染みそうな音を探した結果にすぎない。籠目は呪術的な意味をもつ童歌らしい、ということで遊びを代表するものとして加味してみたものである。

音域が広く超高速パッセージをもつこの曲を歌い切るなら、ヴォーカロイドの独壇場かもしれない。ベートーヴェンにそこまでの時間的な《異国》が見えていたのなら、それも凄いかも。じゃね。

初出：令和三年十一月九日  
加筆修正：令和三年十二月二十日